

第二期 第三十四号 (二版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

2019.05.20 定有堂書店 発行

この先の本屋

仕入れの旅(下)

『きらきらひかる』の世の星よ』

神田は今でも「カレーの聖地」なのか

見る者は、見られている。

平成の最後の国 ～アユタヤの夢～

世界は言葉でできている

坪井日記⑬

四月の誕生日には

鳥取あれこれ その三十三

「フィルハーモニー」の心意気

完全虚構

放哉忌におもう

桜のはなし

…… 編集後記

奈良 敏行

鳥居 貴彦

五島 朋子

萩原 俊郎

結川 真悟

芝野 浩貴

ムラカミヒロシ

齊藤 仁昭

山本千津子

内田 克彦

秦卓 梅林

古賀 啓二

あきの素生

ドラメリア



## 「この先の本屋

奈良 敏行

(定有堂 店主)

どんな「ナリワイ」であれ変化しつづける必要がある。到達したらその回終了で、またやり直さねばならない。一層拡大するかそうでなければ縮小するしかない。縮小すると「シヨハツシヨウドウ」 (@鳥居さん) に回帰する。

わたしは「学び系の本屋」なので、他人の視界にのっかって考えるのが好きだ。いまは京都の鳥居貴彦さんにとっても関心を持っている。

わたしに京都はとても不思議な街だ。豊かな多様性をみせてくれる。「ナリワイ」の宝庫のようだ。この視界が欲しくて、定有堂を開業する年のはじめに少し彷徨ったこともある。

地元の老舗大型書店の人でありながら町衆の気概で生きるあるひとが、小さな商いの本屋をさして、「彼らは違う成り立ちで、まったく違う生き方」なんだ、と本質をついた教えを示してくれたことがあった。

年の暮れに街の本屋を始めたいと訪れた人に、「では、

成功しなくてもいい本屋を始めるといのはどうでしょう」と提案した。この言葉を『音信不通』で目にとめた熊本・長崎書店の齊藤仁昭さんは、「『成功しなくてもいい本屋』の響きのなんと素晴らしいこと」とお便りをくださった。一味同心の感じであれしかった。響きが魅惑的なのは、ここに「違う成立ち」「違う生き方」があるからだ。それが「この先の本屋」だ。

「違う成立ち」「違う生き方」って何だろう。わたしが学ぶべきものはここにあると思える。

四月十五日（月）に久しぶりに京都へでかけた。三月二九日に鳥居さんの本屋が開店したので足を運んでみたかった。店のたたずまいとそして立ち位置（ロケーション）も知れたかった。三月半ばに大阪で会ったときに店名は未確定だったが、すでに「開風社 待賢ブックセンター」と命名済みだ。開風は好きなヨットにからんだものと前に聞いた。「雅号」のようなものなんだと理解した。

お店は「シヨハツシヨウドウ」を体现したものだ。本屋は時代の間尺に合わなくなつてどんどん消えていく。しかし新しい間尺の、つまり「この先の本屋」がここにあるという事実には、とても感動した。間口二間四方だろうか？ とても小さい。そして営業も金土日だけと短い。このところわたしが夢見てきた「縮小する本屋」が、地

面から湧き出たようにここにある。

鳥居さんは少し前の便りに「違う時間をどう淀みなく流し続けていくのか、考えたいと思います」と記していた。「違う時間」と「この先」は同義だ。

この感動をどう言葉にしていにか戸惑い、数年前に京都に居を移した吉田海将さんにぜひ訪ねてみてとメールした。どう説明していいか迷ったが、「とても小さい本屋なので並んでいる本も少ない、でも『こころ』のバックヤードはとてつもなく広い」と付け足した。彼は「たしかミシマ社で一度会ったことがある。すぐ行きます」と返事をくれた。いいタイミングだった。五月から東京に転勤になるころだった。彼は以前「図書館と書店」の記事連載（朝日新聞）をしていたので、「この先の本屋」をどう見るか知れたかった。

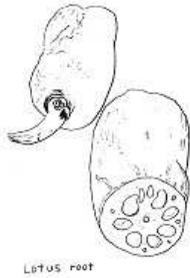
成功しなくてもいい、でも「やり直し」が利くこと、そして手持ちの材料を活かす。ここに「この先」の次元がある。「身の丈」にはじめるということだが、「デザイン」（作り込む）しないということもある。鳥居さんはデザインしない。あるがままで。「評価」（ブランディング）を作り込まない自然体はすがすがしい。

鳥居さんは「待っているんです」とそのことを語った。この言葉があまりに預言に満ちているので、「何を？」と聞くことはためらわれた。

立ち位置を知りたいと望んでいたもので、周辺を案内してくれた。この街にはたくさんレイヤー（階層）がかくれている。余所ではとうに終わったことが、新しいものとして出現することもある。自分のレイヤーを見つけたことが大事ですとも教えてくれた。

「開風社 待賢ブックセンター」はこの日は非営業日で、夕方から用事（ダブルワーク）があると聞いていたので早々に暇を告げた。来るときは「丸太町」まで出迎えていただいた。わたしは水辺がすきなので、帰りは二条城の石垣と堀を見ながらの散策で、「二条城前」まで送ってくださいました。お店の写真は一枚も撮らなかつた。鳥居さんのレイヤーは写真に写せるものとは思わなかつたからだ。

2019. 04. 21



・本の紹介

徳永進 『増補 隔離』 岩波現代文庫 2019. 3

(一) 寄贈いただきました。奈良

副題「故郷を追われたハンセン病患者たち」。文体の柔らかさにもかかわらず、平易な本ではない。虐げられたものへの共感を問うからだ。人の絶望を、平易な「ことば」にのせる著者の姿は、いつも不思議だ。

医療現場で、「ことば」を独特に重視する。病むことよって、「ことば」も隔離されるといふ。隔離された「ことば」に、高校の教室ではじめて出合った。

幼くて 癩病むいわれ問いつめて 母を泣かせし 夜の天の川

国語教師が読み聞かせたものだ。閉ざされたらい者の「自分語り」を「隔離」の外に出してあげたい。大学へ進み、身を隠した「ライフストーリー」を聞き集める。隔離からもれだすのは、こんな「ことば」だ。

わが母は いかにありますか 栃餅に 遠き故里の 因幡が匂う

出身は言うてはならない「ことば」だった。数十冊におよぶ徳永進さんの著作は、平凡な人々の死の際の「ことば」を残す。でもそれは、徳永さんが生老病死の「隔離」から解き放った、「ことば」でもあつた。

ここには、身体を源とする「実の語感」が、豊かに脈打つ。

## 仕入れの旅 (下)

鳥居 貴彦

(開風社待賢フックセンター)

いつも以上にごによごによした自己紹介。というかほぼ誘導されている。「お店をやると聞いていますが」「はい……」「古本?」「いや新刊もおきたくて」「京都のどこで?」「二条城とかの近くです」「ふーん。ということなので、みなさんよろしく」終わった瞬間、沖繩の本も置きたくて、と言うべきだったと、もう後悔している。

「このおせんべい美味しいねえ! みんな食べた?」  
とはしゃいでいたヒサエさんが「どう? 気になる本ある?」と声をかけてくれた。「沖繩文庫は人気だからねえ」とか話していると男性が札を入れた。ヒサエさんは躊躇なく「いくらくらいなの?」と聞く。そんなのありなんだ、と驚くが男性は「デパートに出したら定価でも売れますよ」と微妙にはぐらかしている。定価だと一冊

900円。なら入札は4500円? さらにわからなくなってきた。「そっか」とヒサエさんは納得している。うむ。

考えるのをやめてぼんやりしているとさっきの男性が話しかけてきた。「小原といいます」「僕も京都にいたんですよ、家のお墓があつて」「遠慮せずに入札、してくださいね」一瞬の何気ない会話。かじかんでいた指先に血が通ったような感覚。すすすと4枚ほどメモに値段を書き込みそれぞれの封筒に入れる。急に肩が軽くなる。歩道に車が止まる。小雨堂の店主が話しかけられている。「何してるの?」「業者のセリなんですよ」「レコードとか売れない?」「それはむづかしいかなあ」

宇田さんと知らない古本屋のおじさんが話している。「これ、同じ本2冊のセットなの?」「そうですね」宇田さんの表情は硬い。なにかの話がまとまっておじさんが本を持って行った。

一番年配のおじいさんは座るところを探している。何人かがその辺から板やレンガを拾ってきて即席のベンチが出来上がった。

「あと5分で締め切ります!」天久さんの声が響く。いつやってきたのかわからない渡慶次さんがノートパソコンを開いてスタンバイしている。ヒサエさんが「そのおせんべいの袋つかおっか!」と紙袋を開く。「開札し

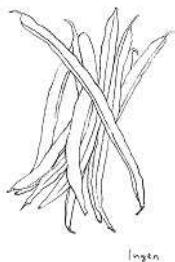
ます！」

「はい、じのん3000円」「ウララ900円」開札がはじまった。1000円以下の落札は、ない。自分が書いた値段を思い出してドキドキしてきた。やつぱり高すぎたか。素人が、と思われたらどうしよう。素人なんだけど。入札した箱がやってきた。「お、いっぱいいつてるね。うーん…1000円…1180円…あ、1200円、鳥居さん。はい、落札」どさつと十数冊の本の束が手渡された。ほーとため息がきこえる。「いい値段だったね」と渡慶次さんがつぶやいた。知らない古本屋のおじさんが「ここに置きな」と場所を空けてくれる。ありがとうございます、とちよつと大きな声が出た。沖縄文庫も落札。小原さんは「版元が倒産して在庫を引き取ったやつだから、ほぼ新品ですよ」と教えてくれる。ざざざと片付けがはじまった。落札した30冊ほどの本を眺めていたらもう誰もいなくなっていた。お昼ご飯行きます？ と声をかけられる。食堂、と書かれた看板をくぐるとそこは漫画喫茶だった。漫画喫茶を奥にすむと座敷になっていて、やはりそこは食堂としかいえない空間だった。さっきのメンバーが大きすぎる机を囲んでいる。渡慶次さんはパソコンをたたいている。天久さんがむづかしい顔をしてノートを開いている。

「お店の場所、どこだったけ？」「いつオープン？」

「お店開けてない平日は何してるの？」「年はいくつなの？」「お子さんいくつ？」「奥さんとはどこで出会ったの？」「いろんな質問がいろんな方向からやってくる。答えは座敷を漂って消えていく。「ここのご飯多いね！」とヒサエさんが隣でうれしそう。ご飯が終わるとお金の精算。「6月と12月にもつと大きな市をやりますから、また来てください」と天久さんが言う。「はい」とまた大きな声が出た。

車の後部座席に山盛りになった本を眺める。遠く京都まで連れて行かれる本たち。帰ったら一冊一冊磨いてやろう。



(編集部注)

「開風社 待賢ブックセンター」 2019.03.29 オープン

所在地…〒602-8125

京都市上京区大宮通樺木町上る菱屋町818

# 『きんぎょくなんのじのせい』

シニア劇団星組第10回公演 … 四月の観劇

五島 朋子

(鳥取大学地域学部附属

芸術文化センター)

中高年になってから演劇をはじめた方たちの演劇活動を、最近ではシニア演劇と呼ぶ。高齢者の演劇といえは、さいたまゴールドシアターをご存知の演劇通の方もおられるだろう。埼玉県立の公立ホール「彩の国さいたま芸術劇場」の芸術監督に就任した演出家故蜷川幸雄が、二〇〇六年に55歳以上の中高年を集めて(20人の募集になんと一二六六人も応募があったそうだ)創設した劇団で、その活躍が全国各地のシニア劇団創設の機運となった。シニア世代に仲間入りした私も、シニア演劇鑑賞に最近足を運んでいる。

四月は、京都のNPO法人アトリエ劇研が運営するシニア劇団星組公演を見た。劇研は、公立文化施設の運営や、演劇の育成普及活動に取組んでいるNPOで、関西

圏で活躍する演劇人たちを指導者に、現在7つのシニア劇団を運営している。俳優で演出家の細見佳代が指導する星組は、その中で最も活動歴が長い。十数名の劇団員は、毎週一回稽古に参加し、細見の指導を受けながら、年一回作品を上演している。脚本は、劇団員とのワークショップを重ねながら、細身が構成するオリジナルである。

今回の舞台は老人ホーム。二人の女性が新たに同居し同室となるが、これまでの人生が対照的でなかなか折り合わない。ふみは、高校の理科教師として長らく勤め、結婚もして息子夫婦と同居していた。かおりは、バーのママとして、独身のまま華やかな暮らしを楽しんできたが、いやいややホームに入居することになった。ホームでは自立して生活できるうちは一階で暮らすが、認知症と判定されると二階へ移動させられてしまう。老人たちは、二階へ行くということはそのまま死へ向かうこと、と恐れている。現実の老人ホームではなく、イメージとしての老人ホームが誇張して描かれている。

入居者同士、老人とそれぞれの家族、そして施設長と介護スタッフの間などの、様々な「あるある」エピソードで同世代の観客を笑わせながら、ホームの生活がコミカルに描かれていく。ようやくふみとかおりもホームに慣れてきたかと思われたが、ふみは認知症と判定されて

しまう。かおりと老人たちは彼女を連れて、ホームを飛び出しオープンカーやバイクで町を疾走する。あつけない警察に捕まりホームに連れ戻される老人たち。警察や家族から「一体何がしたいのか？」と問われた老人たちは、一人ずつ、自分の意思を力強く叫び、舞台から消えていく。実際には、ロバクなので、具体的な内容は判らないのだが。

舞台セットは長机が二台、折りたたみ椅子数脚だけという潔さである。バイクや車も折りたたみ椅子で表現する。舞台奥にセットされた白い幕は、二階へのエレベータに見えたり、ふみが天文の教科書を読み上げると星空が繰り返し投影される。タイトルの「きらきら光るこの世の星よ」は、言うまでもなく高齢者一人一人の輝く人生のことだろう。

セットや小道具に多くを頼らないということは、参加シニアの表現力が作品の説得力に大きく影響する。全編京都弁のセリフまわしは小気味好く、またセリフのトチリもなく、ドタバタ喜劇的なところもあるのに、無理や違和感がなかった。物語を構成するエピソードが、劇団員の体験や実感がもとになっているからだろうか。あるいは、ワークシヨップを積み上げていく稽古を長く続けていること、細見と劇団員の信頼関係、そして指導方法が功を奏しているのかもしれない。また、年齢六十代か

ら七十代の劇団員たちは、やや背中が曲がったり、あるいは肉付きが良かったりと、老いによる様々な個性的身体を持つ。それが返って、魅力的な人物表現につながっていたと思う。

公演チラシは、「今や人生百年時代。長生きは幸か不幸か？」と問う。老人たちの聞こえなかった叫び声は、「誰にでも、最後まで自分のことは自分で決める自由がある！」という強いメッセージを放っていた。シニアが演じる舞台は、参加する中高年にとっても、観客にとっても、モデルなき人生百年時代に、老いとうり向き合っていていけば良いのかを考える絶好のテキストだ。

\*もし、蜷川幸雄が指導した高齢者劇団にご関心あれば、以下の2冊があります。

徳永京子著『我らに光を――さいたまゴールド・シアター 蜷川幸雄と高齢者俳優41人の挑戦』河出書房新2013年

橋田欣典他著『蜷川幸雄と「さいたまゴールド・シアター」の500日―平均年齢67歳の挑戦』平凡社新書 2007年

## 神田は今でも「カレーの聖地」なのか

萩原 俊郎

(新日本海新聞社 東京支社長)

世間に潜むディープなカレーマニアは、ふだんは健全な社会人のふりをして、実はフリーメイソンのように地下深く情報のネットワークを張り巡らしている。私が東京に赴任すると聞いて、その一人、某全国紙の販売局長からさっそく店巡りの情報が届いた。

「手始めはエチオピアですかね、次はスマトラあたり。それからボンデイ、ガヴィアル」。別にアフリカや南方の島に行くわけではない。エチオピア、スマトラ（共栄堂）は、神田にある老舗カレー屋のことである。神田はマニアにとって「カレーの聖地」であり、その有名な店を食べ歩くことは東京勤務のひそかな楽しみでもあった。

ほどなく私の「神田詣で」が始まった。どの店も長蛇の行列。ところが聖地なのに、どうもしつくり来ない。カレーが出る前に、にぎにぎしくバターを添えたジャガイモやらポタージュスープが運ばれてくる。それがどうやら「老舗

の伝統」らしい。その割にカレー本体から「やる気」が伝わってこない。辛さも平板、スパイスの深みや豊かさが感じられない。ある老舗などは、どう見てもライスに比べてルーが少ないので配分に気をつけながら食べたが、やはりライスが残ってしまった。メニューを見ると「追加ルーは××円」とある。「ずいぶんアコギな商売してるじゃねえか」。私の「神田熱」は急速に冷めていった。

ブランドにあぐらをかき、「聖地」の名前が独り歩きしているのではないか。「日本最大」と称するカレーイベントも、一昨年は有名ラーメン店が優勝をさらうなど、クオリティーはあまり高くないようだ。

◇ ◇ ◇

はてさて：時は二十年近くさかのぼる。場所は大阪・南船場。当時、職場の近く、狭い階段を上がった二階に、カウンタートわずかなテーブル席だけの小さなカレー屋があった。店の名は「ヤムカレー」。店主の大ちゃんがイケメンなので、勝手に「キムタクカレー」と呼んでいた。

夏の昼下がりには上半身ビキニの水着美女が店を手伝っていたりして（これもイケメンのなせる業か）驚かされたのが、大ちゃん自身はすこぶる真面目、というより「カレーの求道者」のような男だった。なんでも昔はもつと大きな店をやっていたが、「これは僕のカレーではない、と店を

たたみ、一から出直している」という。いつしか常連になり、会話も交わすようになった。

彼のカレーは日進月歩、具材選びやスパイスの配分もつねに変化しているようだった。どんなカレーに化けるか楽しみにしていたが、見ることなく鳥取に帰ることに。

それからかなり経って、大阪の出張ついでに訪ねると、店がない。「息子なら空堀（からほり）通りに店を出したよ」。隣りで居酒屋をやっているお父さんが教えてくれた。

調べると、古い商店をリフォームしたその店（旧ヤム邸）は、大阪のカレー界に新風を巻き起こしているらしい。大阪駅の地下バル、ダイビル：と旧ヤム邸の支店はどんどん増えていった。やがて、大阪本社に在るカレー女子から、「旧ヤム邸が東京に進出しました！」という緊急情報。

出店先は神田ではなく下北沢だった。「さすがの場所選ぴ」と感心。今や神田のイベントをしのぐ勢いの下北沢カレーフエスの地元、激戦区である。店名は「旧ヤム邸シモキタ荘」。オープン一カ月なのにもう長い行列ができていた。さて、彼のカレーはどんな進化を遂げたのだろう。

◇ ◇ ◇

関西系スパイスカレーはスパイスをからめた肉や野菜の素材のコラボを楽しむカレーである。この日はポーク、ビーフ、チキンの各キーマカレーの「全部のせ」を注文。トッピングとしてキノコ、エビ、白玉麩、白菜の浅漬け、枝豆

の白味噌和え、柿ペーストを三種のカレーの上に乗つけて混ぜ、さらに「追いがけ」として大根おろしと豆苗の入った鶏ガラカレースープを垂らす。味と香りのハーモニーを目と鼻と舌で楽しむ、ぜいたくなひと時。

具材やスパイスの組み合わせは毎日スタッフが知恵を絞って決めるという。「ちよつと、やり過ぎじゃないの」。彼の「求道者ぶり」に思わず苦笑した。ドロツとした欧風カレー、ガツツリ系や辛いばかりの濃厚カレーに慣れた東京人には、この爽やかな後味はかなり衝撃かもしれない。

シモキタ荘はたちまち下北沢を代表する名店になった。それどころか…である。昨年末、NHK「クローズアップ現代」で『カレーにヒントあり、倒産相次ぐ外食に活路』のタイトルで店が紹介されたのにも驚いたが、なんと先月、今度は大ちゃん自身がNHK「プロフェッショナル」仕事の流儀」に『王道×革新、二人のカレーSP』の一人として登場したのである。

「あの大ちゃんがなあ…。なんだか自分のことのようにうれしく、また誇らしく感じてしまった。カレーとは不思議なもので、作り手のこころざしや思い入れ、努力の跡が見事に表れてしまうものだ。インディアン、ポンガラなど関西の他のカレー屋も東京へ進出している。

首を洗って待ってるよ、神田！

## 見る者は、見られている。

結川 真悟

(生活者見習い)

身の回りには、様々な言葉があふれている。放つ言葉放たれる言葉、様々ある。そのどれにも対して、必要以上に神経質にならず、しかし出来る限り繊細に臨まねばならないと思う。

仕事をする上で、腰を落ち着けてのインタビューに限らず、他人に話を聞く機会に恵まれている。求められるのは、「その人にしか話せないこと」を聞き出すこと。普遍的なことは「お行儀のいいこと」「教科書的なこと」として好まれない。難しいのは、個人的な話と普遍的な物語の橋渡し。その人にしか語れないことの中に、他人が共感できるポイントを探っていく。いや、他人が共感できるかは偉そうなので、せめて自分は共感できる、というあたりだろうか。

話を聞く機会に恵まれている、と書いたが、恵まれていると同時に、試されている。緊張を強いられる。何を

聞き出すか、その結果は「聞き手＝自分がその場にどう臨むか」ということに左右されるからだ。

この職業に就く前に、幾人もの、のちに同業者となる先達から話を聞く機会があった（枠組みとしては同業者なのだが、とても胸を張って同業者と言えない、そんな忸怩たる思いもある。しかし、今は棚に上げておく）。

自らの環境が変わりそうな節目を迎え、指針を求めてかつて触れた言葉たちの記憶をたどっていくと、すんなりと腑に落ちる言葉がいくつかある。おそらく、当時から納得感があったことに加え、わずかな数年の体験の中で、自ら実感を得られた言葉なのだと思う。

その一つが、**「見る者は、見られている」**という言葉だ。自らの職業に即して言えば、「取材する者は、取材されている」ということだろうか。

「鳥取の人は恥ずかしがり屋が多いから、なかなか取材するのが難しいでしょう？」。

県外出身の自分に気を遣ってくれてか、そう声をかけてくれる人は少なくない。職場においても、仕事の難しさの一つの理由として、この地元の気質を挙げることもある。

「どうしたら、この人は心を開いてくれるだろうか」「どうしたら、この人はこの言葉を、この映像をこちら

に放ってくれるだろうか」。

取材は決して簡単な作業ではない。ニッチもサッチもいかなくなることだつてある。そのとき、打開策を自分の外側の存在、他者に求めることがある。「どうしたら、この人は……」という発想だ。

しかし、こつも考えられはしないか、と久しぶりに会った奈良さんは言った。「取材が困難に感じるとき、それは取材する方が信頼されていないからですよ」。

まさに、「見る者は、見られている」、という発想である。

私は自分のことを、「仕事として取材する側の人間」だと思つている。私を主語として、「私が○○を取材する」という姿勢で現場に臨む。そして、そこで出会う人たちは、生活の一コマに踏み込んでくる私を、人生の積み重ねとともに見詰め返している。

土足で踏み込まれた、となるか、歓迎して招き入れた、となるか。相手も、自分を主語にして、振る舞いや発言など、こちらを取材して決めているのだ。

そして、「期待する者は、期待されている」、ということも派生してあるだろう。「反発を覚える者は、反発を覚えられている」、ということも然りだ。自分の場合でいえば、どんな話が聞けるだろう、と楽しみに現場

に臨む代価は、どんな成果物になるだろう、という相手の期待を背負うことなのかもしれない。

そして、自ら働く中でこの言葉に感じたこともある。

「見る者は、見られている」という関係性は、ややもすると逃げ出したくなるほど緊張感のあるもののだが、この緊張感があるうちは、まだ健全な状態であるということ。

こちらは見ているが、相手には見えてもらえていない。こちらは期待しているが、相手には期待されていない。もしかしたら、こちらは期待しているが、相手は反発を覚えている。知らず知らずにそんな状態になっていたとしたら、その関係性は危ういということ。

「見る者は、見られている」。自分がこの言葉に触れたのは、通っていた大学の授業でのことだったと思う。その授業は確か書籍化されていて、その書籍は部屋の本棚にあるはずなのだが、今月号を書くに当たって探してみても、パツと見つけることができなかった。

ただ、見つからなくて残念という気持ちはあるものの、実感を伴って口でできる言葉になった、ということに、少しだけ自分の歩みを感じている。

# 平成の最後の国

〜 アユタヤの夢 〜

芝野 浩貴

(地球探検家)

戦勝記念塔のロータリーで車が行き交うのをBTS(高架鉄道の車内で眺めていた。深い眠りの後だった。世界遺産のアユタヤに行こうとバンコクから北上し、チャトチャック公園で、リスが木の実を食べたり、イグアナが水浴びにスプリングラーの側を歩いているのを見ながらも、くねくねした川を渡ったりしていると方向もわからなくなり、やっと辿り着いたバスセンターは市内循環バスばかりだった。公園でバスセンターの方向を聞いても、散歩する人も、落ち葉を掃除するおばさんも、誰一人として隣の場所だのに道を知らない。諦めて北上しかけるが、少し離れたところに遠距離バス停車場があった。多くの行き先別チケット売り場の看板を見て、全く読めないタイ文字の中から、>で始まる文字を探すが、何度

往復してもその文字はない。バスセンターのインフォメーションに尋ねるも自分の窓口のバスに乗らないとわかると手で追い払われる。世界遺産だのに誰も行かないのだろうかと人の流れを観察すると8車線の向こうに何やら人影が… 高架橋を渡ると謎が解けた。テレビで見たことはあったが、ミニバンの乗合バスで数分置きにアユタヤ行きは出ていた。遠距離バスは大きなものという固定観念と北行きと南行きは対面にあるという思い込みがバンコク出発を遅らせた。それから1時間半 80キロを60バツ(1バツは4円弱)で移動だから、安いなあと思つた途端に悲劇は始まる。アユタヤの街に入る前に2キロ手前のあたりで村の人にバスを止められ、「ここが最終だ、早く降りろ！」と促され、慌てて乗客8名は降りる。それぞれバラバラになって、市内の案内図を見ていると、一人の老人がやってきて、トゥクトゥクに乗るように促す。当然無視して、どう歩こうか頭の中を巡らすも、その説明が止まない。

・遺跡はここから数キロある。炎天下のなか歩くのは無謀。  
・バンコク行きバスの最便は17時だから、数箇所巡るには時間がない。

・数時間で効率よく運転して、最後はバス停まで送る。  
という趣旨をずっと話している。聞き流していたが、「アメリカ人は4千バツで、韓国人は3千が相場、日本人は安くして、この前の人は2300バツにした。今日は1800にす

るから乗れ！」と駆け引きが続く。彼が案内した人の母国語の感想と署名と料金を見せてくる。国会よりは説得力のあるデータだった。実際に、英語とハングルと中国語と日本語を話してたから、高いガイド料として質問しながら回ろうと思ひ、眉唾の話を承諾した。ワット・チャイ・モンコン↓ワット・パナン・チューン↓ワット・マタート(有名な木の根に埋め込まれた仏頭がある。仏塔はビルマ軍に破壊される)↓アユタヤ王宮跡とワット・プラシー・サンペット(3基の仏塔はアユタヤのシンボル)↓ワット・ロカヤスタ(寝釈迦仏、頭から足の裏まで私の歩幅で53歩だった)↓ワット・チャイ・ワットナーラーム(カンボジアに対する勝利を記念してクメール様式で建てたの順に巡った。釣鐘型の円錐はスリランカ様式で、丸みを帯びるとカンボジア様式となる。わかりにくい例えだが、タイ文字のコー・カイでいうと、西を下に東を上に見たときのロー・リンの字の流れで主要な遺産を回り尽くした。タイに来たのは初めてで山田長政くらいしか知らないが、長政の活躍した時代のアユタヤは、水の都。城でいうなら、宮殿をチャオプラヤー川とその支流と運河で掘りを作った形にして、農業を行いながら防御した。スコータイ、アユタヤ、トンブリーと地理的にはどんだん南に王朝が追いやられるが海に面してないアユタヤが栄えたのは川の恵みである。山田長政がアユタヤまで船でこれたのは、川の長さが372キロ

あるのに、25日しか高低差がないほど勾配が緩やかだからである。

戦勝国記念塔はフランスに抗しての戦いだが、真珠湾攻撃をした日本が助けたという。今でもタイの経済成長率に日本の道路整備や鉄道敷設技術支援が関与しているとして、タイ人は日本人には優しいという意識もあつたのか…

知人O氏が大澤真幸の講演を聞いて、「三島由紀夫の自殺と豊饒の海のラストの『天人五衰』の関係を青い糸と赤い糸で証明した」と連絡をくれていた。ふたつの謎についての新書は私も読んで私なりの見解は持っていた。何故、半世紀前に豊饒の海第3部を書くために、インドとタイを訪れたのか？溝口は裏日本海に流れる由良川を見て金閣寺を焼く決意をした。ガンジス川で三島は何を見たのか？そして、暁の寺を見て何を思ったのか？乳房はいつ金閣寺に変わったのか？夢は妄想で行為が現実か？バンコク市内でどんだんワット・アルンに近づくのを感じ、自分が何故バンコクに来たのか思い出したが、アユタヤに実際行ったのかは夢の中の夢である。地球探究として海外に行き始めたのは、平成が始まつてからで、それから30カ国は訪れた。平成最後の訪問国がタイあることは確かだった。令和の時代に、3つの黒子をどこに見出そうか。

## 世界は言葉でできている

ムラカミ ヒロミ

（ライオン・ブックマン）

るのである。しっかりと、三十五年遅れの受賞となった訳だ。

山尾悠子といっても、最早ピンとこない人々が大半であらう。

今年の二月、山尾悠子が『飛ぶ孔雀』で第三十九回日本SF大賞を受賞した。昨年九月には、同じ作品で第四十六回泉鏡花文学賞を受賞している。

三月二十五日に誕生日を迎えた彼女には何よりの贈り物となったが、正直な話、なぜ今頃？という感を否めない。まるで、年金を出し惜しみして、老い先短い人間にしか贈らない文化勲章みたいではないか。

いや、久々の新刊が出たタイミングだから、というのは分かるのですよ。それも、純文学畑からの出版ですからね。

しかし、贈るなら、バリバリ書きまくっていた昭和五十年代に贈るべきでしょう。

現に、昭和五十七年の鏡花賞授与式が行われた際に、選考委員の筒井康隆と中井英夫が、来年は誰がいいだろうか、と話し合う中で、山尾悠子はいいいね、と語ってい

昭和五十年、「仮面舞踏会」(SFマガジン)でデビュー。同誌を始め、「SFアドベンチャー」「奇想天外」などのSF専門誌で矢継ぎ早に作品を発表して行った。何れも完成度が高く、どの作品も余人の真似できない、後述するような山尾テイストに満ち溢れていた。

当時珍しい女性のSF作家誕生、ということでも新井素子と並んで、マスコミへの露出度は異様なほど高かった。女性週刊誌やグラフ雑誌に特集が組まれた程である。ジャンル違いの依頼も多かったようで、「歴史読本」とか「小説ジュニア」とか、女性ファッション誌とか、あちこちに寄稿しており、書誌作成者を泣かせる。

いくつかの作品を読めば気付くとおおり、小説というよりも散文詩に近い。言葉に対する感覚が鋭敏で、ガラス細工のようだ。

もともと、詩作から入っていて、高校時代は文学部に所属、イメージの鮮烈な詩を書いている。

もう二十年以上前のことになるが、岡山在住の親しい

友人に頼んで、山尾の母校の訪問取材を敢行してもらったことがある。所属していた部の顧問にインタビュウができ、在学中の作品コピーも入手できるなど、望外の成果を齎してくれた。

これらを見ると、言葉の選び方といい、作品の世界観といい、後の小説作品のプロトタイプと比べていい程だ。

例えば「仮面舞踏会」の冒頭、「黒死病の女が重い衣装をひきずりながら傾いた摩天楼の階段を登ってゆくそんな夜」という一節にしてからが、語彙だけを拾っても、多くの共通点が見られる。

早くから、独自の世界観が確立されていたと申すべきであろう。

彼女の作品は、視覚的イメージが鮮烈であり、絵画的である。

ポール・デルヴォー、ジョルジョ・デ・キリコ、モンス・デンドリオ、モーリッツ・エツシャー、バーン・ジョーンズ、直ちにこれらの画家への連想が働く。

代表作「夢の棲む街」は、キリコやデルヴォーの描く古代遺跡のような街並みに、どこか血の通っていない無機質な人間たちが徘徊しているような印象がある。

もうひとつの代表作「遠近法」は、ジュリオ・ロマーノ描くパラッツォ・デル・テの天井画に触発された、と作者自身が語っている。察するに、出典は学生時代に読んだという澁澤龍彦の『幻想の彼方へ』に違いない。同書や『幻想の画廊から』『夢の宇宙誌』などは、山尾作品の源泉と言ってよからう。

文学は倉橋由美子と高橋睦郎に傾倒したそうだが、文体は塚本邦雄、多田智満子に少なからず影響を受けていると見る。

彼女の作品は、所謂バタ臭いものが多いのだが、近年、和物への接近が顕著で、受賞作の『飛ぶ孔雀』は、その傾向のひとつの到達点を示すものだろう。そういうえば、澁澤も晩年、日本古典への回帰がしきりであった。

山尾の初期作品のひとつ「月蝕」は、筆者の好きな短編であるが、これも京都を舞台にした、氏の学生時代を彷彿とさせる、ノンシヤランに書き流した風でありながら、その実、密度の濃い佳編である。筆者としては、こういう作品をもう少し読んでみたい気がするのだが、『孔雀』の境地に達してしまつては、それも、もう叶うまい。

# 4月の日記

坪井日記 ⑩

齊藤仁昭

(長崎書店)

4月某日

スリッパを廃止した版元がいよいよ増えてきた。H社までスリッパをやめたときは意外だなと感じてしまった。今は手作りのスリッパを挟んで対応しているが流石に量が多すぎて他の仕事の時間を奪ってしまう。もうPOSで確認するしかないのかしら。スリッパなしで本が棚に並んでいると売り物じやないように見えてなんだか気持ちが悪い。でも雑誌にはもともとスリッパはないのだし、単なる慣れの問題なのだろうか。流れに身を任せるしかないか。とある業界紙で某大型書店の方が「スリッパ廃止は大歓迎、その分を書店に還元してください」と発言している記事が載っていた。悲しくなった。経費削減で廃止しているのに還元なんてできるのだろうか。スリッパより帯をやめたらいいんでないかな。偉そうなこと言わずみません。

4月某日

\*

東京は北区の十条にてケバブジョンソンのワンマンライブ。先月号で予約が3名だったと書いたが30名ほどに増えておりひと安心。少ないんですけどいいんです。会場はシネカフェ・ソトというところで映画の上映もできるカフェである。映写機も持っている！数年ぶりに訪ねたが駅から近いしとてもいい場所だ。と思ったら6月までに再開発のために立ち退きをせねばならぬらしい。十条とか再開発して何かいいことがあるのだろうか。ないだろう。ソトと同じ西口には齊藤酒場という大好きな居酒屋があるのだがそこも再開発区域に入っているのだろうか。やめてほしい。

本番は30曲ほど演奏したが楽しくてあつと言う間だった。5月6月7月も東京でライブが決まっているのでお近くの方は遊びにいらしてくださいませ。

\*

4月某日

能楽のイベントに出張販売にお呼びいただく。販売の時間以外は観劇させていただいた。演目の間に能楽の楽器の解説があった。能の楽器は4種類だということさえ

自分は知らなかった。笛、小鼓、大鼓、太鼓。笛は中国、小鼓は朝鮮半島、大鼓はアフリカにルーツがあるらしい。古典芸能も世界中から様々なものを参考にして成り立っているのがわかり、感激した。

さて4つの楽器の演奏だが、基本的に8拍子らしい。

8拍子でもテンポは伸び縮みしているようだが、決まった拍子なしで演奏しているものだと思っていたのでこれまた衝撃を受けた。叩く音や吹く音に加え掛け声も演奏の重要な要素で、掛け声も含めての8拍子で構成されているようだ。面白い。演奏以外にも俄然興味が湧いた。

\*

4月某日

クレジットカードが止まっていたのでまた支払い日に残高不足だったのだろうとせあも取り立ての電話を実家にするのだけはやめて、と思っていたら不正使用があったとの連絡がきた。初めてカード番号を乗っ取られた。高いホテルの支払いや洋服の大量購入を不審だとカード会社が判断し、利用不可にしてくれたとのこと。ありがたいでございます。新規にカードを発行してもらい事なきを得たがどう気をつけたらいいものかわからない。

\*

4月某日

子どもの入園式へ。0歳児は全部で6人。セレモニーで腹話術を披露してくださった先生がおり最高であった。

\*

\*

夕暮れの街を滑り降りて

長い合図が響き渡るころには

夕方6時の鐘が鳴るのも

聴こえないのだ

君は喋り続ける

ごらん誰も皆いなくなつて

たぶんあの子はサメの速度で飛び回るので

白いベッドは焼けだされてしまうよ

ごらん誰も皆いらいらして

(ケバブジョンソン「サメ女」作詞・杉浦真寛)

## 四月の誕生日には



山本 千津子

(ROSHKA コーシカ)

五月から元号が令和に変わる。昭和生まれの私にとっては、引き算をすれば自分の年齢がすぐに言えるので、生年月日は西暦を使うことが多くなっている。「平成最後の」という形容がなされているのをよく耳にするこの頃、私も使ってみよう。「平成最後の誕生日」ということで、もう何十年も祝ってもらった記憶はないが、一人で儀式のようにしている私なりのこの日を紹介させていただく。

旧ソ連崩壊後に極東の沿海地方ウラジオストクは外国人に開放された。太平洋艦隊の軍事基地であることから

他の地域からはロシア人でさえも簡単には来ることができない閉鎖都市であった。1992年4月、まだ直行便はなかったため新潟からハバロフスク経由で、私たち12人のグループはほぼ一日がかりでウラジオストクに着いた。翌日からは極東国立大学付属ロシア語学校での授業が始まった。

ある日のお茶の時間に校長先生はじめ先生方が私たち集めて、私ともう一人の女性が前に呼び出された。何も悪いことをした覚えはないし、何事かと思っていると、突然「お誕生日おめでとう！」と四月生まれの私たち二人にお祝いの言葉とともにカードが挟まれた本をプレゼントして下さった。早く生まれた私が先にいただいた本はプーシキンの選集だった。彼女はレルモントフだった。薄みどりの布の手触りと重さを感じながら、いつかこの本を読んでわかるような日が来るようにとの夢を持った。一生で一番心に残る誕生日プレゼント。

その後も誕生日とは関係なくロシア人から本をもらう機会が何度もあった。出会った日がサン・ジョルデイの日になると言ってもいいほどだ。家庭に招かれてロシア料理やお茶をいただいた後、帰り際に「今日の出会いを記念して」とその場で日付と署名入りで本を渡される。

「私のビブリオチエーカを見て」と言われて天井までの本棚にぎっしりと詰まった蔵書を見せられた時には、ビブリオチエーカは図書館という意味だけではないことを知った。このビブリオチエーカを見てもらうことに喜びを感じているロシア人に何人も会った。

いただいた本はウラジオストクに関係する写真集やガイドブック、ロシア文学全集のうちの一冊、本人のお気に入りの本、手作り感あふれる自作の作品集、そして詩集。私のためにわざわざ一冊購入して用意してくれたいた時もあるし、すぐその場で「私のビブリオチエーカから一冊選んで」と言われることもあった。たまたま本屋でばったり会った知人からは、私の意思とは関係なく一冊買ってプレゼントしてくれた。余命半年の友人がくれたアフマートワの詩集には、「来たる二十一世紀にも私と私の好きな詩人のことを覚えておいてね。この詩集が日本であなたの手元にずっとあつて幸せと愛情いっぱいの日々にしてくれれますように」と書かれている。

今年も開くプーシキンの選集、本とカード、一年に一度だけ。カードには次のようにタイプされている。

「たくさんのことを蓄えて、大きく育って、花開くことを願っています

そして丈夫であるように、だってこれからの長い人生で健康であることが一番大事だから

日々のあなたの時間がいつも何か新しいものを持ってきてくれますように

良き知性を身につけて、それとともに良い心でありますように

すべてのことが上手くいくよう心から祈ります  
でも、そう簡単にはいきませんよ」

そうか、たくさんいい言葉をもらっても、ありがとうだけでは終わらないで、その言葉を胸に自分が努力しないとだめなのだ、とわかった「平成最後の」誕生日。  
やはり使ってみるものだ。

# 鳥取あれこれ その三十二

内田克彦

(地域研究家)

新聞社に緑川「ママ」君を訪ふて帰る。」と『日誌』に書いている。啄木の『日誌』には、企救男について、ここで取り上げた二回しか名前が出てこないが、道夫の『カメラマンの映画史』を読むと、

碧川企救男らによる一九〇八(明治四一)年一月四日の小樽での演説会には、石川啄木も来ていた。啄木の『明治四十一年日誌』から引用する。

会する者約百名。小樽新聞の碧川比企男「ママ」君が体を左右に振り乍ら開会の辞を述べた。添田平吉の“日本の労働階級” 碧川君の“吾人の敵” 共に余り要領を得ぬ。西川光二郎君の“何故に困る人が殖ゆる乎” “普通選挙論”の二席、何も新しい事はないが、坑夫の様な格好で、古洋服を着て、よく徹る蛮音を張上げて、断々乎として説く所は流石に気持よかつた。

啄木は前年の九月二八日に、野口雨情は同じく前年の一〇月一日に、一〇月一五日創刊を予定する『小樽日報』に入社した。啄木は入社した同じ日に、「序を以て小樽

幼いころの記憶として、今でも印象に残っているのは、明治四十年十二月のこと。父も母もないとき、だれか訪ねてきたので、子供の私が応対しました。夕方、表は明るさを残しているものの、シルエットになって、顔は見えません。それが啄木先生だったのです。

とある。その日は、『日誌』の一二月一二日の項に、事務長の「小林寅吉と争論し、腕力を揮はる、退社を決し」と書いている日であったのかもしれない。『カメラマンの映画史』には、続けて次の記述がある。

小林さんは哀れみ、こう言いました。  
年末も押し詰まるころでしたから、

「お母さんや妻子を抱えて、寒空にどうするつもりだ」  
その時、啄木は、傲然と言ったそうです。

「これから、碧川のところへ行く」  
つまり、父のことです。

二〇〇五年発刊時に小樽商科大学教授であった倉田稔著『石川啄木と小樽』を読むと、このあたりの事情が詳しく読み取れる。

因みに、『小樽日報』は創刊して一年も持たず翌年の四月には廃刊となっている。

なお、余談だが、雨情が『北鳴新報』や『小樽日報』で同僚であった鈴木志郎（啄木とは『小樽日報』で同僚となる）から聞いたとされる、妻の連れ子をアメリカ人宣教師の養女に出したとの話に基づき、後年、雨情が「赤い靴」を作詞した、と言われているが、この話は諸説あり、ネット上でも議論を賑わしているため、これ以上は述べない。

また、『小樽新聞』で企救男の同僚（「ウェッブ『池田小百合なつとく童謡・唱歌』」によれば、札幌支局詰、とされる）であった宮原晃一郎が、一九〇八年六月に行われた文部省の新体詩懸賞に応募し、同年一二月に「海の子」が佳作に選ばれた。森銑三著『明治東京逸聞史』の明治四十三年の項に、

この年四月に、新しい尋常小学読本が使われることとなった。（略）その巻十一には、今も歌われる「我は海の子」の歌が出ている。「我は海の子、白浪の、さわぐ磯辺の松原に、煙たなびくとまよこそ、我がなつ

かしき住屋なれ。」以下第七章まである。作者は勿論記されていないが、それは宮原晃一郎だったことを、ここに明記して置こう。私はそのことを宮原さん自身から直接聞いている。文部省で読本に載せる歌を募ったのに応じて当選したので、歌詞は多少直されているということであった。

と書かれているとおり、宮原は「われは海の子」の作詞者である、とされている。

しかしながら、作詞者は芳賀矢一（はがやいち）とする説や作詞宮原晃一郎・補作芳賀矢一とする説があり、一九九九年発刊の読売新聞文化部著『唱歌・童謡ものがたり』では「作詞◆不詳」と書かれている。

また、宮原は、先日入手することができた、『女権』一九二七年五月号に、「我観女権」と題して寄稿している（なお、表紙に掲げた名前は「高原晃一郎」と間違った表記となっている）。恐らくかたが企救男を通じて依頼したものだらう。小樽を離れて東京にいても宮原との関係が依然として保たれていたことがわかる。

（以下、続く）

# 「フィルハーモニー」の心意氣

秦阜梅林（やすおかばいりん）

（楽人）

官民の放送等によく使はれる「管弦樂・ウィーンフィルハーモニー管弦樂團」と云ふ表記。決して間違ひも無いけれど、あくまでも商標名に忠實な、そして通り一遍で如何にも保守的な、此の國のクラシック界の體質を或る意味象徴してゐる。……………

ウィーンの名門オーケストラは、國立歌劇場管弦樂團が母体。其処に所屬する団員（あく迄各個人の社会的肩書きは歌劇場管弦樂團員）の中、選り抜きのメムバーで構成され音樂監督を置かなひ自主運営で年に10度位の定期演奏会（建て前上、國立歌劇場管弦樂團母体なので歌劇公演のある「夜」は基本的に演奏しなひ、マティネーのみ！）ニューイヤヤーや、イースターその他特別コンサート及びサルツブルク音樂祭等への客演を行ふ「彼ら」を地元オーストリアでは愛情と尊敬を込め特別に「フィルハーモニカー」と呼ぶ。ラテン語に云ふ「ハーモニー」をフィル（愛）する人々であつて、管弦樂團やら交響樂團（独乙語ではそんな呼称がある場合は必ずさういふ表

記ヲして長つたらしい名を冠す）では無い。ウィーンフィルハーモニー管弦樂團と云ふ呼び方は、海外に弗や円を稼ぎに出掛ける際の、英語から訳された商標に過ぎず、況やVPOと云ふ略号は、地元では全く知られてゐなひ。……………

独乙語圏のみならずスラヴやラテン語圏に旅すると、欧州では、街の中心地に「フィルハーモニー」と云ふ名をよく目にする。

其れは、管弦樂團（及びその室内樂団体）・合唱団の練習し、公演する本拠地音樂堂であつたり、樂譜出版局やその他音樂關係、或ひは、鑑賞会や放送関連施設で有るかもしれない。兎に角樂を愛する者達の集ふ場と云ふ意味で使はれる。ハーモニーは勿論、音の調和と云ふ短絡的な意味だけでなく、心の調和、つまり平和を希求し、眞理を尊ぶギリシヤ以来の學問と芸術に使はれる。決してこれ見よがしな技のひけらかしや競ひ合ひの見せ物に使はれる事は無く、先ずコンクールありき、極東の後進國とは違ふ……………

もうすつかり昔の話に成つて了つたけれど嘗てウィーンに永年暮らし、音大に通ひ青春を過ごした者として、僕は「フィルハーモニカー」の心意氣にこそ敬意を払いたひ、そして親しみを込め呼びたひ訳だ、「フィルハーモニカー」と。欧州各々の街にフィルハーモニーがあつ

て文化の歴史と伝統、誇りにチョッピリ羨望を感じ初め  
てゐる今日此の頃。

2019.03.27

「今回の3枚」

①「V. ベートホーフエン第五交響曲ハ短調作品67「運命」/Fr.  
シューベルト同第八口短調D.759「未完成」O. クレムペラー指揮  
ヴィーンナーフィルハーモニーカー（ヴィーン楽友協会大ホール 1988  
ライヴ）

②「ドヴォヅジャーク第7交響曲ニ短調作品70/同第8ト長調作  
品88 V. ターリツヒ指揮チエコフィルハーモニー（Rec. 1938/1935）

③ ベートホーフエン同第三変ホ長調作品55「英雄」C. M. ジュリー  
ニ指揮ミラノ・スカラ座フィルハーモニー（ミラノ、アバネラ劇  
場ライヴ 1992）

画. A. T



## 完全虚構

土賀 啓二

（米国ミシガン州 隠棲）

『女六様』という中編小説をほぼ書き了えた。数日前、  
よし、これで終わり、と思ひ、読み返してみると、主に  
時間軸的に辻褄の合わない箇所が数箇所あることに気づ  
き、しかし、この辻褄合わせに腐心し始めると、どんど  
んつまらなくなつて行くことを知っている。

僕は、書き始めの一段落くらいを、まず思いつき、そ  
れがセクシーだと（必ずしも色っぽい、ということでは  
なく、起爆力があると、くらいの意味に於いて）、話が  
膨らんで行く、という傾向がある。以下が、今回の、そ  
もその書き出しであつた…

『人生、やり直せるとしたら、いくつくらいに戻りた  
いですか、などと問われる度に、過去のどの切片にも戻  
りたいと思つたことはなく、しかし、死ぬまでそうだと

したら、自分の人生は何だったんだろう、と思うでしょうね、と出来の悪い笑いを繰り返すように答えるのを常としていたが、二年前の脳血栓で車椅子生活を余儀無くされた後の私にこの質問をした者はまだいない。』

ここから書き進めて行った末の顛末ではあるのだが、時間軸的、論理的に整合させるには、この書き出しを捨てなければならぬことになった。

このインスピレーションの礎である書き出しのパラグラフを、過去は捨て切れず、破綻するがままに任せ、小説は何でもありのゲージツだから、これでいいのだ、と嘯いていたが、やっぱり理屈に合わんとあ、と捨てて書き直したのは、進歩だと思いたい。

今回の作品には、そんなつまらないものを野心などと大層に呼ぶな、と云われるに相違無いが、僕なりに新しい試みがあり、それは、自分の体験には一切根づかないものを書く、ということであった。例えば登場人物の職業にしても、美術教師や小説家、ではなく、僕が全く知らない仕事をさせたい。そして、こういう属性の人物が、こういうことを生業としていたら、どんな考え方、立ち回り方をするか、そのキャラクターに成り切って描写したい。

これ迄の僕の創作のスタンスは、体験したことをそのまま書くわけではないけど、自身の体験に深く根差した事象でなければ書けない、と考えており、それを過去の作品の作中人物である小説家にこう云わせている…

『個人的体験を、一旦ぎりぎりまで手元に引きつけておいてじつと観照し、やがて虚構の彼方に弾き飛ばす(スリングショット効果)、と自分では呼んでいる。』

職業だけではなく、僕の作品にはアメリカに住んでる日本人とか日系人とかがメイン・キャラクターになることが多いのだが、今回は基本、全員(アイリッシュ系だの、イタリア系だのいるもの)白人。この「完全虚構」は、音信不通に掲載頂いた掌編、数作で練習させて頂き、やれそう、という手応えを得た。自己体験に根差したものを書くのに飽きた、というのものもあるかも知れない。

先日、久々に家族全員(僕たち夫婦と娘ふたり)で旅行した。何故か大人になってから飛行機が不得手になった上の子が一緒なのは特に久方振りだ。ワシントンDCの郊外に住む、八十五歳の義母を訪ねる。妻は出張のついで等で、時折顔を見せているようだが、残りの家族が彼女と会うのは、恐らく三年振りくらいか。昨年僕の母が八十六歳で他界したこともあり、遅きに失しないよう、という気運が家内に高まった。かかる短絡的な感傷を嘲

笑するかのよう義母は心身ともに矍鑠としており、一時間ほどの散歩の後でも、次女におにぎりを作ってやりたりして（妻はハーフで、義母は日本人）平然としている。妻と娘たちが買い物に行っている間、限られた共通の話題の中でも、最も間違いない昔話でお茶を濁している、と、長女は大分いいみたいね、と義母。「？」という表情の僕に、次女のお産の手伝いに来て、長女をPreschoolへ迎えに行った際、保育士に「あの子は自閉症かも知れない。他の子が遊ぶ様子をいつも右手の親指を咥えて眺めているばかりだから」、と云われたのを、あなたの耳だけに入れたのに、あなたは出産直後の娘（妻）にそれを告げ、怒ったあの子は即刻、長女をそのPreschoolから退校させたじゃない、覚えてないの、と云う。

僕は愕然として、暫く言葉を失っていたが、「その保育士の髪はブロンドでしたか」、と尋ねると、そうよ、綺麗な子だった、と、僕の核心から大きく乖離した質問を、女の容姿だけは覚えていいのか、と呆れた風で、苦笑している。

「女六様」で、語り手の娘（三人姉妹の長女）が、Preschoolの教師（『よく陽に焼けたブロンドで、南カリフォルニアに広く棲息するタイプだが、その名を冠する人形との酷似性から私と妻は秘かにバービーと呼んでいた』）にその自閉症的傾向を指摘され、激昂した妻が

その場で退校させてしまう、と云うエピソードがある。妻と確認すると、それに近いことはあったけど、退校はさせてない。先生は確かに金髪だったけど、とのこと。完全に創作だと思っていたデイトルが、義母の、それも間違った記憶と合致している、と云うのが何とも玄妙である。当時は、ふんふんと聞き流しつつも、心に澱となって沈んでいたのだろうか。

この小説は昨年（二〇一八年）初頭から書き始めたのだが、母の他界や、その後の父の世話等で暫く頓挫していた。結局、父を高齢者マンションに転居させたりし、都合四ヶ月近く日本に滞在しなければならなかった。作中にも、語り手とその家族が、母親と死に別れ、独りになった父親の面倒を見るため、職まで変えて生地に舞い戻る、と云うくだりがあるが、しかしこれは体験に根差してはおらず、体験に迫いつく格好となっている。

「完全虚構」への道は険しい。

「付記」定有堂HPに創作「感謝祭」を掲載頂いています。  
是非、ご一読ください。

[http://teiyu.na.coocan.jp/journal/keizo\\_0001.html](http://teiyu.na.coocan.jp/journal/keizo_0001.html)

あきの素生

(くうねるめがね)



ひと月前に書くべきだったのかも、と思いつつ、放哉忌に書こうと思ひ立ったということだ。

尾崎放哉に興味を持ったのは学生時代だ。新聞を読んでいて、紙面の下の方に載っている放哉の本の広告が目が留まった。

「咳をしても一人」。

最初の感想は「何だろう、これは」だったと思う。静かに、だけれど、確かな衝撃があった。県外出身のため、小さい頃から放哉の作品に触れる機会がなかなかなかったというのはい訳になる(教科書などには掲載されていたはずだし、自由律俳句についても習った)が、このとき初めて、「尾崎放哉」を強く意識するようになった。それから、放哉について調べ始めた。作品はもとより、人となり、人生など、だんだんと彼について知っていった。そうした中で、惹かれるのはやはり彼の詠む句であ

り、彼の選ぶ言葉だった。「せきをしてひとり」の9文字で、これだけ強い感情、さみしさや孤独感をほかの人にも思い起こさせるって、ただごとではないと思う。他にも心に残る句がいくつもあり、見事にはまっていた。

比較文学という授業の課題で、放哉を取り上げた。その年のテーマは「色」だった。比較対象は種田山頭火にした。具体的に何をどうしたか、といえ、とにかく句中に出てくる色の数を数えた。俳句の鑑賞って、こういうことじゃないかな、と思ひながら、ほかにアプローチの仕方を思いつかなかった。

当時の資料が手元にある。対象は、放哉の句集『大空』の七二六句と、山頭火の一代句集『草木塔』六九八句。色名の含まれている句の数は、それぞれ五四句、三七句。短い字数で表現するものだから、そうそう色名を入れられやしないだろう、と、すべて数え終えたときに悟った。両者とも一番多かった色名は「白」(放哉十七句、山頭火十三句)。山頭火は「緑(青)」(緑色を表していると思われる「青」はこちらに入れた)が同じく十三句。放哉は「赤」が二番目に多く十一句。三番目は、放哉「緑(青)」十句、山頭火「赤」七句。今見ると、上位三つはそんなに大きな差がないように感じる。

興味深かったのは「青」。放哉八句、山頭火三句で、山頭火の三句はいずれも「青空」の句だった。対して放哉は、海の句も多く詠んでいる。

私は性来、殊の外海が好きでありまして、海を見て居るか、波音を聞いて居ると、大抵な脳の中のイザゴザは消えて無くなつてしまふのです。…(略)…一体私は、ごく小さな時からよく山にも海にも好きで遊んだものですが、だんだんと歳をとつて来るに従つて、

山はどうも怖い…と申すのも可笑しな話ですが、…親しめないのですな。殊に深山幽谷と云つたやうな処に這入つて行くと、なんとはなしに、身体中が引締められるやうな怖い気持がし出したのです。(「海」

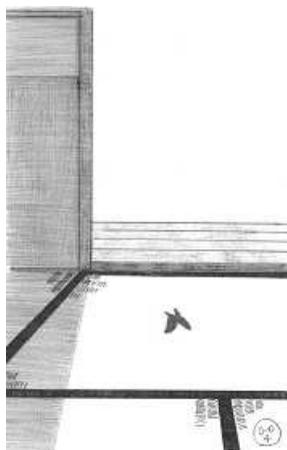
尾崎放哉『日本の名随筆』別巻21 作品社、1992)

山頭火の「分け入つても分け入つても青い山」は、人によつて句の印象がまるで違うのではないかと思う。山の美しい緑を称える句。「分け入つても分け入つても」抜け出せない恐怖や、自然への畏怖の念を感じさせる句。放哉だったら、この句をどのように感じただろうか。私はこの「青」を緑を表すものとして数えたが、もしゴッホの「星月夜」に描かれているやうな、言葉どおり「青い」山がどこまでも続いている様子を表しているのだとしたら、とても怖い。穿ち過ぎかもしれないが。

放哉が海を詠んだ句で、印象に残っているのは、「海がまつ青な昼の床屋にはいる」。

小浜時代の作品だ。夏の昼下がり、少し静かな時間。暑いけれど、海風のおかげで爽やかな心地もする。強い日差しから抜け出すように、床屋へふらりと入っていく。海の見える町に暮らす放哉の姿が目に見え、何だか好きだ。

放哉の「色」の話は、またいつか書けたらいいなと思う。



# 桜のはなし



ドラメリア (座敷わらし)

今年が冬が暖かったせいで、桜の開花も早かった。改まったイベントとしてお花見に練り出したりすることはなく、袋川沿いの桜並木を眺める程度で満足している。

京都に住んでいた頃も近所のお寺の桜を眺めるぐらいしかしたことがなく、今にして思えばもったいないことをしたなあと思わなくもない。

京都の桜と聞くと思い出すのが、合格電報。はるか遠い受験生時代に京都の大学を何校か受験し、合格発表をじかには見られないので電報を頼んだのだが、そのうちの一枚の文面が味わい深かった。

合格のときが「カモノカワラニサクラサク」(鴨の河原に桜咲く)。不合格のときは「ヒエイノヤマユキフカシ」(比叡の山雪深し)。……おおさすが京都、電報の文面まで格好いいじゃないか! と京都に憧れのある田舎っ子はそんなところにまで感動したので、よく覚えてる。さいわい河原に桜が咲いた。

ただ京都の大学すべてがこの調子だったのかというところんなことはなく、同じく京都の別の大学から受け取った電報は「ウカッタヨオメデトウ」で、あっけらかんとしたストレートさに思わず笑ってしまった。「合格おめでとう」ともなにか違う、醸し出されるフレンドリーさの原因は、語尾の「よ」か。

しかし後々少し気になったのは、不合格の場合はどんな文面なのだろう、という点。合格の文面にならうと、まさか「落ちたよ残念だね」とか……? こうなると、フレンドリーな語尾の「よ」が、むしろ逆効果のような気がするが。



## ・編集後記:

この号が出るころには、世間は黄金の十連休(わたしはシフト勤務なので関係ないですが)。十日も続けて休むと脳みそがふやけてしまいうそうなので、三、三、四ぐらいに分割されている方が嬉しいです。

ドラメリア(編集長)

南陀楼綾繁さんが「山陰中央新報」に「音信不通」をご紹介くださいました。4・26(金)。リトルプレスの連載シリーズ第2回。

奈良敏行(発行人)